

# 活動レポート

## 道北技術士会

文責：道北技術士会幹事 山田 哲

### 平成24年度 現地研修会を開催

#### 1. 研修日程および概要

「北海道の森林づくりと農畜産物の先進的な取り組み」というテーマで先進的な施設や研究機関を見学し、各講師の方から説明を受けた。

(1)日時：2012年(平成24年)8月24日(金)  
8:20～17:30

(2)場所および講師

①農業生産法人有限会社 神内ファーム21(浦臼町)  
専務取締役 古河 和幸 氏

②北海道立総合研究機構 林業試験場(美唄市)  
企画調整部 主 幹 西田 基二 氏  
森林環境部 研究主幹 島田 宏行 氏  
緑化樹センター 所 長 黒丸 亮 氏  
緑化樹センター 研究主幹 山田 健四 氏

#### 2. 神内ファーム21

神内ファーム21は「克冬制夏」をテーマに施設型農業を確立し、収益性の高い南国果実の栽培や赤毛和牛の生産など北海道農業の新たな可能性に挑戦している。マンゴー等の南国果実を主要品種として流通ルートや生産・加工・販売の一貫体制を整備して6次産業化を図り、また国内で流通している和牛の9割以上が黒毛和牛であることを憂慮し、赤毛和牛の普及や地位向上・産地確立にも取り組んでいる。

一方、農業で独立を志す塾生を受け入れて人材育成や就農支援を行い、また栽培技術・情報の提供、地域還元等も積極的に行い、農業生産法人ではあるが社会企業的な側面も大きい。

浦臼町の山中に600haの広大な牧場と近代的なフィルムハウスの施設群が立ち並ぶ光景に驚いた。代表の神内氏は消費者金融「プロミス」の創業者・元会長で70歳を過ぎてから前職を後継に譲り、私財

を投じて農業を始めたという。若い頃果たせなかった「北海道の開拓民となって農業で成功する」という夢を実現するために理想の農業に邁進している。

持続的な発展や収益性の確保が今後の課題ではあるが、北海道の気象条件を克服し北海道の優位性を活かした神内ファーム21の取り組みは北海道農業の新たな可能性を与えてくれると感じた。

マンゴーは浦臼町の特産品になりつつあり、今年7月から道の駅「つるぬま」でも販売を開始している。種類はアーウィン種とナムドクマイ種があり、品質は宮崎産に劣らないと好評である。



マンゴーの栽培状況



施設見学状況

### 3. 林業試験場

林業試験場では森林資源の充実や林業経営の改善、森林の公益的機能の高度な発揮、身近なみどり環境の充実等、森林・林業・みどり環境に関する試験研究を行っている。今回はその一部である防風林の多面的機能や木製防雪柵の開発、法面緑化植物等の研究概要について各講師の方から講習を受け、施設内の緑化見本園・見本林を見学した。



本庁舎玄関で記念撮影

#### ○防風林の多面的機能

防風林には多面的な効果があり、風害の軽減や農村景観の構成の他に作物の増収効果がある。防風林の付近では日陰による生育不良は発生するが、防風林には強風を緩和する効果があり弱風化した区域で増収となるため、全体の収量は防風林がない場合よりも多くなることが確認されている。

また、防風林周辺の風の流れの研究成果を木製防雪柵の開発にも応用し、大きな防雪効果が得られる柵形状を開発した。

#### ○法面緑化植物

従来、法面の緑化には表面侵食の防止と景観形成を目的として外来種のイネ科草本が用いられてきた。外来草本は成長が早く竣工直後から緑化できるという長所があるが、繁茂した後に衰退するという短所もある。外来草本の衰退後、北海道の自生植物であるササへ移行する場面が多いが、外来草本からササへの移行は長い時間がかかり裸地へと至るケースもあるため、ササを用いた法面緑化技術の開発が進められている。

また、緑化植物の種の選定には一般論としての地

域適応性のみではなく、現場条件を十分考慮する必要があると強調されていたことが印象に残った。

#### ○緑のカーテン(ツル植物)

ツル植物による壁面の被覆(緑のカーテン)は室内温度の上昇を抑制することが知られている。ツル植物は巻きつる、巻きひげ、吸盤、気根など種によって取り付け方が異なるため、壁面の凹凸や網の格子形状など緑化対象によって適性を考慮する必要がある、登はん能力や被陰の効果などの研究が進められている。



山田氏のご講演



緑化見本園見学状況

### 4. おわりに

例年、本会では地域の活性化や地域資源の活用等様々な分野において先進的な取り組みを行っている施設等を見学し現地研修会を開催しています。今年の研修会も地域の活性化を考える上で参考となる事例が多く参加者からも好評でした。

最後に、研修会にご協力頂いた講師の方々にお礼を申し上げ、ご報告とします。